

江戸時代以降の刀 ＜新刀時代＞

新刀の時代とは豊臣秀吉が天下を統一して伏見桃山に居城を構えてから徳川300年の泰平の世を経て、明治・大正・昭和～今日に至るまでの期間をいいます。そして文化、文政期（1800年初め）より現代までの作刀を新々刀として新刀を更に細分しています。

古刀時代の末期は長く続いた戦国時代に膨大な需要にこたえるために先人が精魂を打ち込んで一刀ずつ丁寧に製作した方法では注文に間に合わず、これまでの難しい技術を捨てて簡素化し安上がりの方法が工夫され良き古法の技術の伝承は杜絶してしまいました。

その後、大阪城が完成すると商業の中心地として発達した大阪には全国から大名・武士や帯刀を許された商人たちの注文が殺到したくさんの新刀鍛冶の名手が誕生しました。一方、江戸に徳川幕府が樹立されると地方から多くの刀工が来て江戸鍛冶繁栄の基礎を築きました。

新しい刀工達は古刀鍛冶のように一人一箇伝（例えば備前伝工は生涯、備前伝だけに専念する）にこだわらず古刀期とは違った作刀を行っています。当時、刀鍛冶の居住地は大都市や城下町に集中していきました。

慶長より寛文頃（1596年～1672年）までの作品は鎌倉時代の作風を手本とした優秀なものでしたが徳川も中期の太平の世にはいと武士道の廃頹につれて刀工の技量は低下し特に元禄頃（1688年頃）からは本筋をはなれた華美な刃文が京・大阪を中心とした刀工によって数多く作られました。元禄時代、商人は蓄財を進め裕福になり、帯刀が許される脇差が盛んに作られるようになりました。



新刀：焼刃は簾（すだれ）をイメージした「簾刃」（すだれば）、打ち寄せる波をイメージした「濤乱刃」（とうらんば）等の装飾性の強いものが流行。

しかし徳川時代も末期の文化・文政頃（1804年～1829年）になると尊王攘夷の聲が高く、世情は物状騒然となり、武家思想の変動とともに鍛刀界にも大転換が行われました。この時代以降の作刀を新々刀と呼びます。

簡素化された鍛錬法を改め古刀の鍛錬法に復元すべく東でも西でも復古鍛錬法に移り古刀の名作の模倣が盛んに行われ特に古刀の備前伝と相州伝の写しや模倣がその主体をなしています。



新々刀

簡素化した新刀の鍛刀法に不満を持ち、水心子正秀（すいしんし まさひで）をはじめとする優秀な刀工が「刀剣復古論」を提唱し鎌倉・南北朝時代の日本刀を研究、再現を試みました。
多くの刀工が賛同し、古い時代の刀の模倣を行うことになりました。

明治維新になる前の尊王攘夷や討幕運動で死闘が続いた時代は「勤王刀」と呼ばれる二尺八寸の長さで無反りに近い剛刀が薩長土肥などの志士を中心に全国に普及しました。

明治維新になると封建制度の崩壊、社会情勢の変化は刀剣を無用の長物となし、明治5年（1872年）には廃刀令の発布で名実ともに不要となり伝統を守り続けてきた刀工達は転業を余儀なくされました。

しかしながら明治中期になると世情は安定し刀剣は伝統ある美術品として、刀剣愛好家の努力や明治天皇がひじょうに刀剣を愛好されたことなどから、当時の芸術界最高の名誉であった皇室技芸員（現在の人間国宝にあたる）に月山貞一、宮本包則が選ばれ鍛刀技術の保護、養成がとられるようになりました。



脇差 宮本包則 90歳の作 大正8年2月10日

昭和の世になると軍部勢力の拡大にともない軍刀ブームの時代に入り昭和12年ごろから第二次世界大戦にわたり軍刀はいよいよ不足し製作は需要に応じきれず刀の恰好さえしていれば高価に売買されたの

で無鍛えの^{え せ かたな}似非刀で「昭和刀」と呼ばれる速成品が大量に現れました。



昭和刀：軍刀

(日本刀の様に鍛錬して作成されていないため美術品に該当せず、教育委員会へ刀剣登録ができません)

敗戦後は GHQ により刀剣所持は許されませんでした。その後の社会情勢の変化などもあり個人の所有が認められ更に昭和 28 年には日本刀の製作が可能となりました（禁止されていた剣道などが出来るようになったのも昭和 28 年から）。

「現代刀」は新々刀を更に細分化して廃刀令以降、そして昭和年代生まれの刀工が作刀した刀を指しますが一般的には現在活躍中の刀工の作品を主として「現代刀」と呼んでいます。
現代刀も新々刀同様に古作上位作を狙ったものがほとんどで新々刀に比較して更に姿恰好のバランスがよく採れ、新鮮で近代感覚にあふれた作柄です。



刀 銘 八鍬靖武 昭和 45 年 2 月作

これまで第 1 回 直刀時代から古刀そして新刀まで紹介してきましたが新刀については範囲が広く文字数が多くなってしまいました。

最期までお読みいただきありがとうございました。

「刀の歴史」については、この第 5 回で終了させていただきます。

居合道の修行をされている皆さんには日本刀とその歴史についても興味を持って頂けたなら幸いです。

<参考文献>

日本刀の鑑定と観賞：金園社 常石英明

日本刀：岩波新書 本間順治

日本刀の歴史：金園社 常石英明

日本刀辞典：光芸出版 得能一男

古代の刀剣：吉川弘文館 小池信彦

<写真・図>

バーチャル刀剣博物館

「刀剣ワールド」より

文責：松成 初博